

信濃教育

巻頭言

別れの教育

「『さよなら』『ありがとう』声の限り 悲しみよりもっと大事なこと 去りゆく背中に伝えたくて」

一昨年社会現象にもなった「劇場版『鬼滅の刃』無限列車編」の主題歌「炎」の一節である。主人公が伝えたい「悲しみよりもっと大事なこと」とは何なのだろうか。

太宰治は小説『グッド・バイ』を、唐代の詩「勸酒」に付した井伏鱒二の訳「『サヨナラ』ダケガ人生ダ」を引き、「別離の傷心は深く、私たちは常に惜別の情の中に生きているといっても過言ではない」と紹介している。

また昭和の歌人であり劇作家でもある寺山修司は「幸福が遠すぎたら」という詩の中で「さよならだけが人生ならば 人生なんかいりません」と言っている。

別れのとらえ方もいろいろあるものだ。

学校は、出会いと別れの連続である。毎年必ず出会いがありそして別れがある。先日若い先生たちと話をする機会があった。「先生になってよかったと思うときはどんなときか」の問いに、ある先生が「卒業式で今までの大変だった思いが報われたとき」と話してくれた。苦しいこと、辛いこと、悲しいことが多くあったが、卒業式の日、子どもたちからの言葉や涙や笑顔でそれらすべてが流れてしまう。よくわかる話だ。そして一週間もすると、また新しい子どもたちの前に立っている。そう考えると、別れがあるから出会いがあるのかもしれない。

私が若い頃、ある学校でお世話になった校長先生が「別れの教育が大事だ」とよく話をされた。「別れの教育」の意味はよく分からず、そういうものか、と思っていた。今でも「別れの教育」がわかったとは言えない情けない私であるが、去りゆく子どもたちに「悲しみよりもっと大事なこと」を伝えることができる大人でありたいと思う。